

## 枝物生産(花木)

### 1. 植物の特徴

植物の種類は多岐にわたる。地域ごとの山で育つ本来の植物を活かすことが山での枝物生産の特徴だからだ。その場合もっとも重要な点は市場とのマッチングで、生け花初め需要のある花木が整備する山に自生するかどうか—あるいは移植・新植して適しているかどうか—の見極めいかんで生産に活かせる植物は決まってくる。逆に、そこが活かされれば、無用とされて下刈りしなければならぬやっかいものに見えていた植物が宝に変わる。

枝物例としては

紅葉物…アブラドウダン(バイカツツジ)、ナツハゼ、コナラ、ニシキギなど

芽吹物…ナナカマド、マンサク、カツラ、カラマツ、ホウ、リョウブなど

葉物 …クマザサ、ソヨゴ、モミ、アセビ、サカキなど

実物 …ツルウメモドキ、ツクバネ、アケビ、クリ、野バラなど

花物 …ヤマブキ、シャクナゲ、コブシ、ヤマボウシなど

その他多種多様。

### 2. かつての活用

花材としては以前から需要があったので、里におろしてハウス栽培がされるものもあったが、林内で生産するという形態はまれだった。木材生産をめざした山づくりの中では基本的にこれらの多くは不要なものとして「邪魔者扱い」だった。

### 3. 荒廃の現状

針葉樹人工林を育てる山づくりにおいては常にこれらの植物は下刈・除伐対象であったので、人工林の手入れが行き届いている場合はこれらの植物は見られないか珍しい。一方、手入れ不足の人工林においては主に込み過ぎによる日照不足でこれらの植物はやはり見られないか珍しい。また、薪炭林などに利用されていた里山では、種類によっては繁茂しているものもあるし、混成している場合もある。しかし、放置人工林同様に日照不足や風通し、水分の過不足などさまざまな要因に置かれている。

### 4. 整備している事例

長野県下伊那郡松川町で約 40 年にわたり山で自生する花木を主に生産出荷している小椋幸宏さんは、農協の花木部会の顧問、県の指導林家などとして講習・指導を続けている。

枝物生産を経営の主力とするようになったのは、用材生産のための山づくりがピンチになったことから始まっている。獣害よるヒノキ林の食害やアカマツ山が風倒木被害を受けたりなどをした後に出たアブラドウダンやナツ

ハゼが花材として人気があることを市場で知ったことで思いきった方向転換をはかった。被害を受けたアカマツもヒノキも最終的には伐採をしてアブラドウダンやナツハゼの山に仕立てていった。

小椋さんによれば、この「思いきり」ができるかどうかは枝物生産の一つの鍵となる。日照と風通しなどの林内環境が花のつき具合、色具合を大きく左右するが、木材生産が主になるとどうしても思いきった伐採が手控えられる。目的を定めて低木である枝物が十分に育つような手入れが要諦になる。

## 5. 整備の仕方と工夫

整備する山にどんな花材になる植物が育っているのか、育つのか、その中で市場で売れるものは何か。かかる経費と売り上げとのバランスはどうか。この観察と調査がしっかりできれば、整備そのものはシンプルである。その目的の植物を残して邪魔になるもの—高木も中低木も—は伐採する。基本はこれに始まりこれに終わる。

アブラドウダンやナツハゼなど、小椋さんのところで主力の花木は切り方にはいわゆる失敗はないという。切った株からは翌年再び育つので仮に今年の枝ぶりがあまり良くない、切り方が少し良くなかった、と思ってもそれは来年に影響しない。ただ、4年生(切ってから4年経過したもの)のアブラドウダンなどは小枝がよくついて枝ぶりが美しくなる。とはいえ、花材はさまざまな趣が求められるので、木材生産に求められる「まっすぐで枝を落として」というような明確な良材の概念は不要である。

一方、スギの林縁・林床で育てているアジサイは、丁寧な剪定が必要で手がかかるタイプ。花芽と葉芽があるが、翌年の花のためには収穫後には花芽の少し上のところからすべて切らなければならない。一株に、多ければ20本以上の枝が出ているが、すべての枝を花芽を確認しながら切る。光の調整でスギは思いきった間伐がされているが、適度な日陰も必要なので皆伐はしていない。土壌はアジサイには少し湿気のあるところが望ましいので、スギ林の適地と合致する。コアジサイも同様。

このスギ林内でのアジサイ栽培は、一般的な出荷の梅雨どきから7月にかけてだけでなく、“秋アジサイ”と呼ばれる秋季での貴重花材にもなる。日照がスギによってうまくさえぎられると、9月まで花が新鮮なままでつくものがあるからだ。特徴は、梅雨時期のものよりもより一層色が濃く鮮やかになることで、そのために珍重される。

また、新たに道を開設したり、それまで木がなかったような場所は日当たりの良さを利用してサクラの枝物が育てられる。新規増設の道端は土壌が不安定になっているので、土壌をしっかりさせ崩れにくくすることにも役立ち一石二鳥となる。里に下ろして畑作的に育てる場合が多いが、山で育てる方

が成長しすぎずに花材として姿が良くできる。枝が伸びすぎる(徒長枝)場合には環状剥離をさせる手がある。皮に少し傷をつけて伸びを抑えるやり方だ。こうすることによって枝と枝の間が間延びしない姿の良いものが育てられる。

サクラは特に花が開く手前の頃合いのつぼみ状態で出荷することが大事になる。花芽の状態を確認して収穫後自宅横に設置した灯油ボイラーによるハウスで一時温度管理を行い出荷時期にあわせてつぼみが開きかの状態までになったものを出荷する。

里山を悩まし増殖の激しいタケ(寒冷な長野県の松川ではハチクという細い竹)もハナタケという花材にできる。ハナタケの造り方は、6月ころに頭と枝先を切り止める。すると上や横に伸びず、各枝で密生した丸みを帯びた形に仕立てられる。放置していてタケの込み具合が激しい場合は一度皆伐してしまう方がやりやすい。

モウソウチクならば正月用に使える。

皆伐や林道開設などで若いマツが生えている山ならば、門松用に三段松(頭に一本、横枝が二段の形)にすることができる。これも頭を切り止めて、枝を使用。三段の形になった枝の順に出荷すれば一本のマツから何回も出荷できる。

クリは実物として需要があり、大きくなったものも使うが、接ぎ木をするとその年から小さいかわいい実がたくさんつく。花材として人気。

自宅の横手の小さい山は、ドウダンツツジ、アブラドウダン、ナツハゼ、ゴンスケ、クリ、マツ、などなど少量多品種を育てている。これは信頼関係ができた華道の業者が直接見に来て花材をとっていく山に仕立てている。華道の流派によって好まれる花材や大きさ、枝ぶりなどに違いがあり、業者はそれに合わせてとっていく。そのためこの山は下刈りはすべて手鎌を使ってよりていねいな刈り方をしている。

## 6. 課題と注意点など

地域の山本来の自然を活かす枝物は、四季折々の季節感を演出できる人気の素材で華道がある限りすたれることはないと言っている。さらに利点として以下があげられている。

木材のように外材との競争がないし作業も安全で難しくない。特に木材生産の林業では邪魔物・不要なものとして除伐しなければならない「やっかいもの」だった植物が活かせる。

ただし収穫までに年月を要する品目もあるし、市場までの運搬上生産経費と売上げが釣り合わなくなるものもあるので、その点をきちんと考慮して実施することが大切。特に出荷に際しては以下のような点に留意する。

- ・採取は早朝から午前7時までの間に行い、ただちに水に浸ける
  - ・コモ、新聞紙、畳表、布、シートなどで常に巻いて風邪にあてない
  - ・低温の状態管理し、切り口には新聞紙、脱脂綿、スポンジなどを濡らし巻き水分の発散を防ぐ
- など。

このように山での整備そのものには技術的には難しさが少なく、需要もあるが、山で自然を生かしながらの枝物生産をするには大きく言って3つの注意点がある。

1つは、上木は思いきった伐採をすること。これは森林所有者にとって山の木は財産という感覚が強いので最初の大きな壁になっている。小椋さんは前述のように肉体的にも木材生産より楽で需要も確かと言いながら、山での枝物生産がそれほど増えない理由の最大のもは、この「今ある木を思いきり伐ることの難しさ」をあげる。経営方針を180度転換するような気持ちが必要ならば、「あえて」伐ることはなかなかしづらいからだ。そのためにも、きちんと経営方針を建てることになる。

2つ目は、リサーチの重要性。市場に密に足を運び、常に花材の動向を調べ売れ筋・人気の花材が山のどこに行けば手に入るか、自分の山で育てられるかの調査が枝物生産の要にある。

3つ目はコストパフォーマンスを十分検討すること。その気になれば花材になるものは山にたくさんあるが、収穫して市場に出荷するためにかかる手間（コスト）が花材の値段と釣り合いが取れるかどうかをきちんと計算すること。全般的に、設備投資を大きくしたところは燃料—ハウスなどのための一の高騰で倒産に追い込まれたりなどが多い。特に最新式の設備を備えた工場的な栽培をしてしまうと、厳しい現状となっている。

小椋さんが30年以上前につくったハウスは家庭用の灯油ボイラーでお湯を沸かして床下に設置したパイプを循環するシンプルなもので、外気温とハウス内温度の設定で自動的に動くような段階にはあるものの、現在開発されている高度なハイテク機能を駆使したハウスとはかけ離れたローテクだ。空気の循環をさせる扇風機や湿度の調整なども、古いものを使って自力制作してコストを抑えている。これらすべてはコストパフォーマンスを考えて極力設備にはお金をかけないことが、自然栽培に大きく頼る山での枝物生産の成功の秘訣のようだ。

## 7. 備考

花材については奥様が華道をたしなんでいたことで大いに援軍となったという。長年二人三脚で生産、出荷を続けてきた。